

インタラクティブ空間演習 (女子美術大学大学院)

「イーミック」と「エティック」の視点

3章 「1. 記号と意味作用」 pp.78-88
(2014-09-17)

池上嘉彦 著「III. 創る意味と創られる意味—意味作用をめぐる—」、『記号論への招待』

担当: 石井 拓洋
ishii05042@venus.joshibi.jp

2014

【復習】「分節」と「差異」作用 p.76

記号表現
「子ども」

記号〔表現〕は、様々な対象、現象の中から、「同じ」意味、「同じ」価値をもっているものを選び出し、まとめあげる。
記号はどのように自らの視点に基づいて対象に区分を入れる (c.f. 76)

違う

「子ども」 「子ども」 「子ども」 「子ども」

「異なっているのに同じである」 記号内容 c.f. 76

【復習】「分節」と「差異」作用 p.76

記号表現
「子ども」

記号の「分節」という働きは、「同じ」価値としての 等質性を強調すると共に、「異なる」価値としての 差異性を強調する (c.f. 77)

異なる

「分節」

「異なっているのに同じである」 記号内容 c.f. 76

「分節」と「差異」作用 p.76

記号表現
「子ども」

「分節」= articulation
n. 明瞭な発音 (すること) by "Genius G4"
→ ※ 解かりやすく分割すること

異なる

「異なっているのに同じである」 記号内容 c.f. 76

【復習】「分節」と「動機づけ」 p.77

記号表現
「子ども」

何が「同じ」で、何が「違う」か。対象界をいかに「分節」するか。
これを規定するのが「コード」 (c.f. 77)

異なる

「異なっているのに同じである」 記号内容 c.f. 76

「イーミック」と「エティック」 pp.78-80

「イーミック」 emic
「エティック」 etic 視点としての

- 文化間にみられる 〈ちがひ〉を考察するために有効な視点
- 本来は「言語学」の用語
- 米国の言語学者 K・L・バイク (Kenneth Lee Pike, 1912-2000) が提唱
- この用語は「文化人類学」分野でも応用的に取り入れられている

「イーミック」と「エティック」 pp.78-80

「イーミック」 emic な視点とは？

- 研究対象とする文化のメンバーとしての視点 (native viewpoint)
- 記号現象に対して「コード」にもとづいて文化を理解する視点
- 例) ある文化を見通す上で「病気は悪霊によって発病する」という当地の言い伝えを受け入れる 視点。
- 「エミック」ともいう

「イーミック」と「エティック」 pp.78-80

「エティック」 etic な視点とは？

- 「コード」にとらわれない科学者の普遍的 視点 (ちがうものはちがう)
- 記号現象に対して「コード」から離れて判断する分析的な視点
- 例) エティックな視点 = 「病気は悪霊ではなくて、病原菌によって発病する」という分析的な視点
- イーミックな視点 = 「病気は悪霊によって発病する」という文化内の言い伝えを受け入れる 視点。

「イーミック」と「エティック」 pp.78-80

〈兄弟〉の概念 ~日本語文化編

- 日本語では〈兄弟〉の概念は「コード」によって区別される。
- 「アニ」と「オトウト」として区別される。
- 両者を区別する日本のコードをふまえる「イーミックな視点」で〈兄弟〉の概念をみれば、両者は「異なる」



「アニ」

⇔



「オトウト」

「イーミック」と「エティック」 pp.78-80

〈兄弟〉の概念 ~英語文化編

- 英語文化では〈兄弟〉の概念は「コード」によって区別されない。
- 英語のコードを尊重するならば「Brother」として「同じ」
- しかし、生物学的には両者は「異なる」
- 「イーミックな視点」で〈兄弟〉の概念をみれば、両者は「同一」
- 「エティックな視点」で〈兄弟〉の概念をみれば、両者は「異なる」



「アニ」

「イーミック」
=
「エティック」
×



「オトウト」

「不変項」と「可変項」 pp.81-83

本来の「イーミック」と「エティック」

- もともとは言語学分野の「音韻論」と、言語学以外の「音声学」に由来
- 両者は「言語音をどのように捉えるか」が異なる
- 【音韻論】の視点
言語音を機能の立場から意味の区別に因与するか否かで〈同異〉を判断。その基本単位としての音素を定める
- 【音声学】の視点
言語音を生理学的・音響学的に扱う。

「不変項」と「可変項」 pp.81-83

音韻論の視点 (イーミックな視点 = 「同じ」を看取する視点)

- 問題となる言語で「同じ言語音」としての価値の規定に関心をもつ
- 「銀河」 = 「が」は、「破裂音の /g/」でも「鼻音の /ŋ/」でも「銀河」の語として同一
- しかし、「が」を「ぎ」と発音すると、「銀河」ではなく「銀座」となる。
- したがって「銀河」の認識において、/g/と/ŋ/は同じ。/z/は異なる。
- 「銀河」を「ぎ」「ん」「が」とするよう、音韻論では言語音を分解する。分解した言語音を「音素」という。

「不変項」と「可変項」 pp.81-83

音声学の視点 (エティックな視点 = 厳密に科学的に判断する視点)

- 問題となる言語で「同じ言語音」としての**価値の規定**に関心はもたない。
- 言語音をひたすらに科学的・客観的に判断する。
- 例): 「銀河」が実際に発音される場合、厳密には同じ発音は2度とない。全て異なる。
- 音色、声の大きさ・高さ、発音の早さ、など発音は多様に変化する。

「不変項」と「可変項」 pp.81-83

音韻論の視点 (イームックな視点 = 「同じ」を看取する視点)

- 音韻論の視点は、各国語の在り方(コード)をふまえて、語の発音の変動・変種の背後にある**恒常的なもの**・「不変的なもの」を読み取ろうとする視点(イームックな視点)。

※ 「恒常的なもの」・「不変的なもの」 = 「構造」

「記号表現」 pp.83-85

「記号表現」 (シニフィアン)に求められること

- 多様な意味の伝達を可能とするために「多数の記号」が必要

[But] 「多数の記号」では記号同士が類似するために明確な区別が困難

↑ (矛盾) ↓

- 明確で効率的な伝達のために、記号は「単純」で「少量」である必要がある

[But] 「単純」で「少量」な記号では多様な意味の伝達は困難

「二重分節」 pp.85-88

「二重分節」 ~ <単純で少量の要素>が<多数の記号>を生む仕組み

- <単純で少量の要素> = 単純で少量の「言語音」 (= 音素)

「世界中どの言語をとってみても、そこで用いられる言語音の数は、いくら多くても数十を超えることはない」(日本語は約50音)

- <多数の記号> = 「言語音」 (= 音素) の組み合わせによって多数の記号を作る

/ら/く/だ/ (3つの単純な音素で)

→ 「らくだ」, 「百済(くだら)」, 「墮落(だらく)」

※ アナグラム

「二重分節」 pp.85-88

「二重分節」 ~ <単純で少量の要素>が<多数の記号>を生む仕組み

(文章) 「赤い子馬は走る」

↓

(第一分節) 「赤い」「子馬」「は」「走る」

↓

(第二分節) /あ/か/い/, /こ/う/ま/, /は/, /は/し/る/

「二重分節」 pp.85-88

「二重分節」 ~ <単純で少量の要素>が<多数の記号>を生む仕組み

(文章) 「・・・ —— ・・・」 (「SOS」のモールス信号)

↓

(第一分節) 「・・・」「——」「・・・」 (「S」「O」「S」)

↓

(第二分節) /・/・/・/, /—/—/—/, /・/・/・/

「モールス符号(モールス信号) (一覧)」 <http://www.benricho.org/symbol/morse.html>

「二重分節」 pp.85-88

「二重分節」 ～ 〈単純で少量の要素〉が〈多数の記号〉を生む仕組み

- ・ 言語のような「記号」は、一般に、より小さな「記号素」に分節できる。

※ 視覚的記号などは、この限りではない。

以上